



芥川龍之介のすすめ

その3

『藪の中』

検非違使に問はれたる木樵りの物語

さやうでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違ひございません。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた所でございますか？ それは山科の驛路からは、四五町程隔たつて居りませう。竹の中に痩せ杉の交つた、人氣のない所でございます。死骸は縋の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございます。いえ、血はもう流れては居りません。

一人の侍の死をめぐつて、捕らえられた強盗、死骸の発見者の木こり、強盗を捕らえた放免の話が語られる。また侍の妻は清水寺で懺悔をし、侍の死霊は巫女の口を借りて当時の有様を語る。しかしいずれも自分を中心に語り、話は核心部分で微妙に食い違う。真実はすべて「○○○」である。

芥川が三〇歳の時に発表した短編小説で、一つの出来事を複数の視点から描く構成が特徴です。

「犯人は誰だろう？」とわくわくしながら読み進めると、きつと後悔します。正直なところ、何度読んでもよくわからず、頭の中に「？」が浮かびます。何事も白黒をはっきりとつけたい性格の人にはおすめできませんが、たまにはこのもやもや感を楽しんでみてください。